

9年前に水谷青少年問題研究所を設立した。以来、日本全国の子供たちから相談を受けている。電話相談の件数は数えきれず、メールは延べ80万通ほど。関わった子供たちの数は25万人に上る。毎晩のように、子供たちから悲鳴と助けを求める声が上がっている。研究所のスタッフの合言葉は、ただ一つ。「一人の子も死なせない」だ。でも駄目だった。関わった子供たちのうち、8人が殺人の罪を犯した。133人の尊い命を、自殺、事故、病気によって失った。50人の子供たちは、薬物（ドラッグ）によって命を奪われた。一つの命を失ったたびに、私もスタッフも自分を責めた。「あのとき、ああしておけば。ああ動けば」と、後悔ばかりだった。何度ももう辞めようと考えた。それでも続けてこられたのは、関わった子供たちの多くが笑顔を取り戻し、明るい昼の世界に戻ってきて

夜回り先生、いのちのメッセージ

くれたからだ。彼ら、彼女らから届くありがたい言葉が、私たちの活動の原動力となっている。

そんな相談の仕事が、いままでに一度だけ、10日間にわたり停止したことがある。2011年3月11日、東日本大震災の日からの10日間である。私もスタッフも数多くの仲間を

OD（薬物の過量摂取）を繰り返して、死にたい、死にたいと先生に訴えて、甘えていた自分が恥ずかしいです。いま、私は避難所の救護班にいます。避難所のドクターが、私のリストカットやODを治療してくれた先生だったから、顔を合わせた瞬間に言われちゃった。『君は、手当てのプロだろ。』

た。それから、眠ってくれたよ。いつも先生が言っている、困っている人のために何かをすることが、相手の人にも自分にも、こんなに大きな力になるってこと、初めて分かりました。だから私、もう死にたいなんて言わない。リストカットもODもしない。先生、ありがとう——

「人のため」が生きる力に

失い、ともかくいまは、相談を受けることより現地へ行くと動いていた。そんな私たちのもとに、1本のメールが届いた。数年前から関わっていた、気仙沼の少女からだった。

手伝え」って。先生、こっちは夕べ、雪が降ったんだよ。底冷えのする中で、私の担当のおはあちゃんか『寒い、寒い』と言って震えていた。だから私ね、このおはあちゃんの毛布の中に潜り込んで、ずっとなんか泣きながら『ありがとう、ありがとう』って言ってくれ

私もスタッフも、このメールを読んで泣いた。この日から、また相談の仕事が始まった。今に苦しみ、悩んでいる人たちに、私が伝えることは、いつもただ一つ。「人のために何かしよう。帰ってくるありがとうの言葉や優しさが、君の明日を拓く。君の生きる力になる」と。